

イザヤが語った「心かたくなにする」メッセージとは

「イザヤ書」からの説教 (No.1)

【聖書箇所】 7章1節～9節

主要聖句: 7章4節

「気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません。あなたは、これら二つの木切れの煙る燃えさし・・・に、心を弱らせてはなりません。」

ベレーシート

●しばらく、イザヤ書からメッセージを取り次いで行きたいと考えています。イザヤ書は預言書の中でも最も長く、66章もあります。1～39章までが前半、40～66章が後半です。

●今回は、7章を取り上げましたが、そのひとつ前の6章にはイザヤの召命について記されています。そこはとても重要な章ですが、あえてそこから一つのポイントだけを取り出すとすれば、神に召されたイザヤが語るべきメッセージとは、人々のニーズに合ったような、人の心を喜ばして励ますようなメッセージではなく、むしろ反対に、人々の心を頑なににするメッセージでした。つまり、多くの人々を神の救いに導くための働きではなく、むしろ神の救いから遠ざける働きでした。いわば、なんら生産性のない働きをするのです。神のことばを語れば語るほど、人々の心は頑なにになり、神から離れて行くという務めをしなさいというのです。そんなこととはつゆ知らず、「だれをその働きに遣わそうか。だれがこの務めを引き受けて、行ってくれるだろうか」といった意味の主の声を聞いたイザヤは、すかさず、「ここに、私がおります。私を遣わしてください。」と言ってしまったのでした。事の真意を知らされたイザヤは、「いつまでですか」と問いかけます。それに対する神の答えは以下のとおりです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書6章11～12節 括弧の部分は説明。

11・・・「(ユダの)町々は荒れ果てて、住む者がなく、家々も人がいなくなり、土地も滅んで荒れ果て、

12【主】が人を遠く(バビロン)に移し、国の中に捨てられた所がふえるまで。

●「心をかたくなにする」メッセージ。それが実際どのように表されたのか、それを示している最初の例が7章です。イザヤは最初から最後まで一貫して「神から来る静けさ」を説いた預言者でした。あらゆる危機的状況においても、決してあわてることなく、神を信頼して、落ち着いて、静かにしていなさい。静かにしていれば救われるというメッセージです。なぜ、このようなメッセージが人々の心をかたくなにするのでしょうか。それは私たちが当時の中東の政治的背景を知らないからかもしれません。イザヤの言う「静かにしていなさい」と言うメッセージは、ただ神にのみ信頼して、絶対的中立の立場を貫くということを意味しています。当時は、北にはアッシリヤ、南にはエジプトといういずれも強大国の勢力があり、中東はその間に挟まれていました。特に北のアッシリヤの勢力はエジプトまでその支配を拡大しようと狙っていました。強大国の勢力の動向は、中間地帯にいる中東の国々にとっては、微妙な政治的かじ取りを余儀なくされました。危機打開のためにどうすべきか道を探っていたのです。そのような時代にイザヤは召し出されて、ユダの王と民に「心をかたくなにする」主のメッセージを告げなければならなかったのです。

1. アラム・エフライム連合軍との戦い

●では、さっそくイザヤ書 7 章 1 節を見てみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】

ウジヤの子のヨタムの子、ユダの王アハズの時のこと、アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ベカが、エルサレムに上って来てこれを攻めたが、戦いに勝てなかった。

●この 1 節はこれから語られる話の結論です。これはヘブル語法のひとつの特徴で、結論が最初に置かれているのです。したがって、2 節以降はその説明という文章構成になっています。ですから、新改訳では 2

10	ウジヤ(アザルヤ)	790	51 年	○善	イザヤ	ミカ	722 サマリア陥落 ユダ単一 王国時代
11	ヨタム	750	16 年	○善			
12	アハズ	735	16 年	悪	預言者 空白時代	エレミヤ (624 活動)	612 ニネベ陥落 新バビロン帝 国台頭
13	ヒゼキヤ	729	29 年	善			
14	マナセ	696	55 年	●最悪			
15	アモン(暗殺)	641	2 年	悪			
16	ヨシヤ(暗殺)	639	31 年	○最善			
17	エホアハズ(獄死)	608	3ヶ月	悪			

節の冒頭を「ところが」と訳していますが、むしろ「さて」と訳したほうがよく理解できます。

●1 節を良く観察してみましょう。「ウジヤの子のヨタムの子、ユダの王アハズの時のこと」です。ウジヤ王が亡くなった後に、その息子のヨタムが即位しますが、5 年も経たずに亡くなり、その息子アハズが王となります。表によれば、ヨタムは 16 年間の治世となっていますが、父ウジヤが高慢ゆえにツアラトになってしまったために 10 年間ほどの共同治世が含まれています。また、表では**アハズ王**の評価は神の目には「悪」となっています。ちなみに、彼の父と祖父、そして彼の息子のヒゼキヤも評価は「善」となっています。しかし、ヒゼキヤの息子のマナセの評価は「最悪」です。伝説によれば、このマナセによって、イザヤはのこぎり刑に処せられたようです。

●さて話を戻して、アハズ王が即位してまもなく、「**アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ベカが、エルサレムに上って来てこれを攻めた**」とあります。なにゆえに、アラムの王レツインと、イスラエルの王レマルヤの子ベカが、エルサレムに上って来たのでしょうか。それには理由がありました。先ほども少しふれたように、当時の中東はアッシリアという強大な勢力の脅威にさらされていました。それゆえ、アラムと北イスラエルは反アッシリア政策を取り、南ユダと共に三国同盟を結んでアッシリアに対抗しようと、南ユダ王国のアハズ王に使いを送って、誘いをかけたのです。ところがアハズがこれを拒否したために、アラムとイスラエルの連合軍は、エルサレムに攻め上り、アハズを殺して、自分たちに都合の良い王を立てようとしたのです。なぜなら、アッシリアと戦うのに、南のユダが仲間でないなら、安心して戦うことができないからです。

●予備知識として、北イスラエルのことをエフライムとも言います。エフライムの首都はサマリア。そのサマリアを治めている王はレマルヤの子ベカです。エフライムと同盟を結んだアラム(シリアとも言います)の首都はダマスコ。そのダマスコを治める王はレツインです。

北イスラエル	アラム
別名、エフライム	別名 シリア
首都 サマリア	首都 ダマスコ
王 レマルヤの子ベカ	王 レツイン

(1) ユダの王と民の心の動揺

●さて、イザヤ書 7 章 2 節に「エフライムにアラムがとどまった」というニュースがダビデの家(ユダ)に告げら

れた時、王の心も民の心も、林の木々が風で揺らぐように動揺した」とあります。「エフライムにアラムがとどまった」という表現は、北イスラエルがアラムと同盟したことを意味します。そのニュースを聞いた王と民の心の狼狽ぶりが、「林の木々が風で揺らぐように動揺した」とたとえられています。なんともユーモラスな表現です。

(2) 布さらしの野への大路のそばにある上の池の水道の端で

●動揺したアハズは、イスラエルとアラムの連合軍がエルサレムを包囲することを想定して、籠城するために必要な水源確保のために「布さらしの野への大路のそばにある上の池の水道の端」に実地調査に赴いています。その場所で、主から遣わされたイザヤと出会うのです。主は、アハズ王が包囲攻撃に備えて飲料水を確保するために水路を点検しに必ずそこに行くことを知った上で、イザヤと彼の息子「シェアル・ヤシュヴ」を遣わしたのです。神の民の王が国家存亡の危機にあつてまず行くべきところは、水源の場所ではなく、別の場所であるはずでしたが、そうではありませんでした。

●実は、イザヤが「シェアル・ヤシュヴ」という名前の息子を連れて行ったことも、主のことばを告げた場所自体も、隠された預言的な意味を持っています。息子の「シェアル・ヤシュヴ」(שְׁאֵרְיָשׁוּב)―読みの表記は「シェアル・ヤーシューヴ」―という名前は「残りの者は帰って来る」という意味です。これはイザヤ書における重要な思想の一つです。これは、神の徹底したさばきを通して、はじめて神に立ち返る残された者たちがいることを意味しています。

●イザヤがアハズに語った場所である「布さらしの野への大路のそばにある上の池の水道の端」とは、エルサレム郊外にあるギホンの泉のことであり、この泉からエルサレム城内に水を引いていたようです。水の少ないエルサレムにとって、籠城のための水源確保は絶対に不可欠です。しかし、いみじくも、アハズ王の息子ヒゼキヤの時代に、アハズが立ったその同じ場所に、アッシリヤの王セナケリブが立ちます(イザヤ 36:2)。この水源を手中にしたセナケリブはエルサレムを陥落できると確信したに違いありません。ところが、アッシリヤの18万5千人の軍勢は御使いによって一夜にして死に絶えます。そのために、セナケリブは撤退を余儀なくされたのです。そのことを、もしアハズが知っていたなら(もうすでに死んでいますが)、真に頼るべきお方はだれかを知って、その方の前に赴いたはずです。しかし、後の祭りでした。

●国家存亡の危機にあたって、アハズ王が水源を確保するために、なによりも「布さらしの野への大路のそばにある上の池の水道の端」へ赴いたことは、一国のリーダーとしてきわめて常識的で、当然のことのようにみえます。しかし、彼はそこでイザヤを通して「心かたくなにさせる」神のことばを聞いたのでした。いよいよイザヤに与えられた「心かたくなにする」メッセージというものがいかなるものであるかが実際に開示されます。

2. アハズに対する神の忠告・進言(7:4~9)

(1) 「気をつけよ」

●イザヤがアハズに語った主のメッセージは以下の通りです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書7章4節

「**・気をつけて、静かにしていなさい。恐れてはなりません。あなたは、これら二つの木切れの煙る燃えさし、レツインすなわちアラムとレマルヤの子との燃える怒りに、心を弱らせてはなりません。**」

●4 節には四つの動詞の命令形があります。その四つとは、①「気をつけなさい」、②「静かにしていなさい」、③「恐れてはならない」、④「心を弱らせてはならない」です。

●最初の忠告である「気をつけなさい」(「ヒッシャーメール」**הִשָּׁמֶר**)は、「守る」という意味の「シャーマル」(**שָׁמַר**)の受動態の命令形です。「注意する、心を留める」という意味ですが、何に注意するのか、何に心を留めるのかと言えば、それは神の教えであるトーラーにです。この最初に来る忠告・進言は他のものに比べると最も重要なものです。神である主はアハズのすべてを知っておられて忠告・進言しておられるのです。たまたま訪れた国家的危機に対する場当たりの対応の問題ではないことを念頭に置かなければなりません。四つの警告はすべてが密接につながっています。最初のボタンがかけ間違えば、そのあとに続く他の三つの忠告もすべてクリアできません。

●実は、イザヤ書 7 章だけではアハズ王の本当の姿が見えてきません。彼のしたことはⅡ列王記 16 章に記されていますが、アハズ王は神のおしえを全くと言っていいほど守っていませんでした。アハズは当時の異教の文化に関心を持ち、それを取り入れてそれを真似ることに熱心な王でした。当時の世の文化、世の思想、世の中の法則に染まっていたのです。彼は、「異邦の民の、忌みきらうべきならわしをまねて、自分の子どもに火の中をくぐらせることまでした」(Ⅱ列王記 16:3)のです。これはモレク崇拜という儀式で、神が最も嫌うことでした。神がカナンの地で一番禁じていることとして、「あなたの子どもひとりでも、火の中を通らせて、モレクにささげてはならない。あなたの神の御名を汚してはならない。私は主である」(レビ 18:21)と告げているにもかかわらず、アハズはこの神の戒めを全く無視して、神の御名を汚したのです。神のみおしえが心に刻まれていなかったからです。そのようなアハズに、主はイザヤを通して「気をつけなさい」と忠告(警告)しているのですが、素直にアハズが聞くことはないことを知っておられて、あえて主はイザヤに語らせているのです。最初のこの忠告だけでも、アハズには心をかたくなにさせるに十分なものと言えます。

●7 章では、2 節の「心が動揺する」というイメージを持って 4 節の「気をつけて」という言葉を結びつけると、どうしてもここで主がアハズに語りようとしていることが希薄になるように思います。かといって、ふさわしい訳語が思いつきませんが、少なくとも、新共同訳の「落ち着いて」という訳はあまりにもその深刻さが表わされていないように思います。ここははっきりと、「気をつけよ。」「(神の教えに)心を留めよ。」という明確な命令形として訳すべきです。王として絶対に守らなければならないことがあるからです。「シャーマル」(**שָׁמַר**)が最も多く使われているのは申命記です。その上で、「静かにせよ」との進言が続いていると考えるべきです。

(2)「静かにせよ」

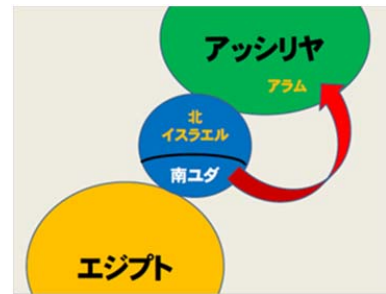
●二番目の進言である「静かにしていなさい」は、「シャーカト」(**שָׁקַט**)の使役態の命令形です。「シャーカト」は波風が立つことのない安らいだ平穏な状態を表わしますが、具体的には、神を信頼して人間的な画策を一切しないことを意味します。敵が攻めて来ることが分かっているのに、なんら手立てを講じることなく、神にまかせるということは、普通の人間には恐ろしくてできません。何か手立てを講ぜずにはいられないのです。これが人間です。ですからイザヤがアハズに語った「(神を信頼して)静かにせよ」「なにもするな」とのことばは、それだけでも十分に彼の心をかたくなにするメッセージとなるのです。

●事実、アハズはイスラエルとアラムの連合軍が攻めて来ると分かってから(あるいは、分かる前から)、国家的危機を回避すべく画策をしていたのです。そのことがⅡ列王記 16 章 7～9 節に記されています。

【新改訳改訂第 3 版】 Ⅱ列王記 16 章 7～9 節

7 アハズは使者たちをアッシリアの王ティグラテ・ピレセルに遣わして言った。「私はあなたのしもべであり、あなたの子です。どうか上って来て、私を攻めているアラムの王とイスラエルの王の手から私を救ってください。」

8 アハズが【主】の宮と王宮の宝物倉にある銀と金を取り出して、それを贈り物として、アッシリアの王に送ったので、9 アッシリアの王は彼の願いを聞き入れた。そこでアッシリアの王はダマスコに攻め入り、これを取り、その住民をキルへ捕らえ移した。彼はレツインを殺した。



●アラムの王レツインと北イスラエルの王ペカたちからアッシリアに対抗する同盟を結ぼうとする申し出を拒否した段階から、おそらく、アハズはひそかに大国のアッシリアの王ティグラテ・ピレセルと手を結び、アッシリアの支援を取り付けていたのです。

●神への信頼が損なわれるとき、人は自分の目線でより確かなものにすがりつこうとします。アハズがその例です。彼はアッシリアから支援してもらおう同盟関係を結ぼうとして、使者を遣わしてアッシリアの王ティグラテ・ピレセルに次のように言いました。

「私はあなたのしもべであり、あなたの子です。どうか上って来て、私を攻めているアラムの王とイスラエルの王の手から私を救ってください。」(Ⅱ列王記 16:7)

●「しもべ」であることをあかしするために、神殿の宝物倉から多くのものを取り出して贈物をしました。しかしそれは、やがて要求されるだけの貢物を納めなければならなくなるはじまりでした。アハズは、本来、主なる神に対して告白すべきことばをアッシリアの王に対してしてしまったのです。そのために、ユダはかろうじて国としての体裁は守られましたが、完全に属国としてアッシリアの言いなりになってしまったのでした。政治的な面だけでなく、宗教的にも言いなりになったことが見て取れます。やがてアハズがアッシリアの王に謁見するため、ダマスコに赴きます。そこで彼が見た祭壇の詳細な作り方を記した図面と模型を祭司ウリヤに送り、それと同じものを造らせました。おそらく、そこにも何らかのアッシリアからの宗教的な威圧があったと思われます。そして伝統的なソロモン神殿を中心とした神の秩序を破壊して別のものにすり替えてしまったのです。

●アハズに求めた「静かにせよ」との命令は、人間が作り出す落ち着きではありません。あくまでも、主に信頼することから来るものなのです。

(3) 「あなたが信じなければ、長く立つことはできない」

●主はアラムとエフライムがアハズに対して企てている悪事は起らない、それはありえない、つまりそのようなことは成功しない、実現しないと告げています(イザヤ 7:5~7)。事実、ダマスコのレツインは2年後に殺され、サマリヤのペカも同じ頃に暗殺されます。そして65年後(B.C.669年)までに、北イスラエルの民は完全に滅びる(消滅する)ことが預言されています(イザヤ 7:8)。但し、B.C.722年にサマリヤは陥落していますが、民としての滅びは少し後のようです。

●ここで重要なことは、9節後半に、「あなたがたが信じなければ、長く立つことはできない」と語られていることです。新共同訳は「信じなければ、あなたがたは確かににされない。」と訳していますが、これを肯定形にするならば、「信じるなら、長く立つことができる」、「信じるならば、確かにされる」となります。ヘブル語で「信じる」という語彙と「長く立つ」「確かにされる」という語彙は、同じ語

根「アーマン」(אֱמָן)を含んでいます。信じるという行為は、「神によって自分を確かにさせる」ことを意味します。イザヤ書7章で主がアハズに忠告していることは、「神によって自分を確かにさせる」ことがなければ、あなたがた、すなわち、ダビデに約束された王国は長く立つことはできないのだということです。この条件は、アハズにとって、十分に「心かたくなにさせる」メッセージと言えます。「神によって自分を確かにさせる」と、つまり神を信じることはアハズにとってもはや不可能の域にあったからです。

3. 心をかたくなにするメッセージとは

●ここで、逆行するようですが、イザヤが召命を受けた時に語られた主のことばに目を向けてみたいと思います。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書6章9～13節

09 すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』

10 この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように。」

11 私が「主よ、いつまでですか」と言うと、主は仰せられた。「町々は荒れ果てて、住む者がなく、家々も人がいなくなり、土地も滅んで荒れ果て、

12 【主】が人を遠くに移し、国の中に捨てられた所がふえるまで。

13 そこにはなお、十分の一が残るが、それもまた、焼き払われる。テレビンの木や榎の木が切り倒されるときのように。しかし、その中に切り株がある。聖なるすえこそ、その切り株。」

●9～10節は何を言わんとしているのでしょうか。マタイの福音書13章14節以降にこう記されています。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書13章13～15節

13 わたしが彼らにたとえて話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしないからです。

14 こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。『あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。15 この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、目はつぶっているからである。それは、彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟って立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』

●イエシュアは神の国のことをたとえて語られました。なぜ、たとえて語られたのでしょうか。それは聞く者に分かりやすく語るためではありません。たとえて語ったのは、そのたとえが意味することを自ら尋ね求めることがなければ、その意味は理解できず、悟ることもできないようにするためです。そのことを聖書は「彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、また、悟ることもしない」と表現しているのです。

●アハズはイザヤの語ったことばの意味について、一切、問うことも、尋ね求めることもしていません。それゆえに、「立ち返っていやされることがない」、つまり、悔い改めることは「すでに遅し」ということが宣言されているのです(イザヤ7:9～10)。そして11～13節で言おうとしていることは、それゆえに、必ず神のさばきがもたらされるということ。同時に、そのさばきを通して、残りの者が返ってくるという一縷の望みを告知しているのです。

2014.8.10